

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

自ら学び、かかわり合い、自分の思いを表現できる児童の育成
～「読み」を通して～

四万十市立西土佐小学校

実践概要：

新学習指導要領の趣旨を踏まえた資質・能力ベースの国語科の授業づくりを目指し、図書館資料及び新聞等を効果的に取り入れた授業改善を進めてきた。

1年目は、図書館資料及び新聞活用を効果的に取り入れるため、教材文の学習の進め方を中心に基本的な国語科の授業づくりに取り組んだ。

2年目は、主体性を大事に、目的や相手意識のある適切な言語活動を位置付け、対話の充実を図りながら表現する力の育成を目指した。その際、国語科の「言葉による見方・考え方」、「情報活用能力」を意識して取り組むことで文章の叙述に基づいた根拠を述べたり、そこから自分の考えを述べたりする力、資料から必要な情報を取り出したり、自分の考えに合う資料を選択して活用したりする力など「読む力」の向上につながった。

キーワード：目的・相手意識、言語活動の充実、図書館資料等の活用、対話の充実、語彙力

1. 研究仮説

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、学習指導要領における「読む力」とはどのようなものなのかを確認しながら、以下の取組をすることで、読解力の向上が図られ、児童自らが課題をつかみ、考え、表現し合うようになると考える。

【仮説1】

辞書の活用や言葉のきまりを取り入れた学習をすることで語彙が増え、主語と述語の関係や、言葉の係り受け等を理解し、文章を正確に捉えることができるようになるのではないかと考える。

【仮説2】

単元で身に付けたい力に最適な言語活動を位置付け並行読書を行うことで、児童の意欲や目的意識を高め、主体的に文章を読む力や幅広い読書を行うことができるのではないかと考える。

【仮説3】

図書館資料や新聞等を活用した授業改善を進めることで、初読の文章やあらゆる形態の資料の要点を捉える力や、複数の文章を関係付けたり、文章と資料を照応させたりする力が付くのではないかと考える。

2. 実践方法

三つの仮説を推進するために、仮説ごとに具体策を定め取組を進めた。

(1) 語彙力を育成し、文章を正確に捉える力の育成

- ①国語科の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を位置付けた指導の充実
- ②帯タイムや裁量の時間による漢字・言葉のきまりの定着、新聞や辞書を活用した学習

(2) 主体的に読書に向かう児童の育成

- ①学校図書館教育計画の見直しと学期ごとの修正
- ②学校図書館の環境整備
- ③図書利用のアンケート調査や冊数集計結果

を踏まえた読書の促進

④学校新聞づくりコンクール、読書感想文等への取組

(3) 図書館資料や新聞を活用した言語能力及び情報活用能力の育成

- ①新学習指導要領に基づく資質・能力を育成するための授業改善
- ②各学力調査や授業力チェックシート（年間3回以上）の検証による授業改善
- ③図書館資料や新聞を計画的に活用した国語科の年間計画の見直し
- ④先進校視察や研究会への参加を通じた自校の取組改善
- ⑤全学年による公開授業を通じた系統的指導の研究

3. 実践内容

(1) 語彙力を育成し、文章を正確に捉える力の育成

①国語科の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を位置付けた指導の充実

・年度当初に、各単元において「伝統的言語文化と国語の特質に関する事項」を確実に指導することができるように年間計画に指導事項を位置付けた。また、国語の教科書の単元ごとにある「言葉の力」「言葉」、巻末ページにある「言葉の広場」を参考にしながらゴールとなる具体的な子供の姿を確認し、語彙力を高めるようにした。

・掲示スペースを活用して、故事成語や四字熟語について意味と使い方を併せて示したり、ことわざの一部の言葉を隠すなど工夫して掲示することで言葉への関心をもたせる環境づくりを行った。

②帯タイムや裁量の時間による漢字・言葉のきまりの定着、新聞や辞書を活用した学習

・漢字の意味理解の弱さから、帯タイムの漢字学習では前学年の漢字について漢字かな交

じり文のプリントを使用し、読み取りと書き取りを交互に学習しながら語彙を増やす取り組みを進めた。

・裁量の時間（ぐんぐんタイム）を水曜日の6校時に設定し、辞書を活用した意味調べ、言葉のプリント、新聞記事を活用した学習を行った。辞書活用の際、1・2年生は調べた言葉に付箋を付け、調べた量による意欲付けを行いながら辞書に慣れ親しませ、3年生以上の意味調べは、漢字ドリルにある熟語や「読むこと」の領域単元の中で分からない言葉を調べてノートに書かせることで言葉の意味理解、語彙を増やすことを目指した。また、前学年までの言葉のきまりについての理解を図るため、市販のプリントを活用して主語や述語、修飾語など基礎的な力の定着を図った。新聞記事を活用した学習では、高知新聞社のワークシートを活用し、低学年では好きな記事の写真を選んで感想を書き、中学年では、新聞記事に対する意見や感想を、高学年では意見や感想に加え5W1Hを書き抜くなど段階的に取組を進めた。



写真1：辞書を活用した意味調べの様子



写真2：新聞を活用した学習の様子

(2) 主体的に読書に向かう児童の育成

①学校図書館教育計画の見直しと学期ごとの修正

・図書館資料や新聞等を効果的に活用するために、年度当初に、学校図書館教育全体計画等を見直し、各教科等において情報活用能力の育成を図れるよう計画している。また、学期ごとに全教員で実施状況を確認するとともに、より効果的に活用できるよう修正した。

②学校図書館の環境整備

・日本十進分類法に基づいて本を配架し、さらに新刊図書、読書感想文や読書感想画などの課題図書、「きっとあるキミの心にひびく本」のリストブック、防災・平和などの特設コーナーを設置し、児童が目的に合わせて選書できるよう整備した。

・新聞に親しませるために、新聞ラックを整備し、比較して特徴及び共通点や相違点を捉えることができるように、毎日異なる二社の一面記事を玄関に掲示した。

・次学年への見通しをもたせるため、学期に1回を目標に図書館資料を活用した学習の成果物（国語科）を学校図書館に掲示し、他学年のおすすめする本などを紹介した。

・図書支援員と連携し、月や学期ごとに学習の成果物の掲示や季節に合う壁面作りなど親しみやすい学校図書館の環境づくりに努めた。

③図書利用のアンケート調査や冊数集計結果を踏まえた読書の促進

・読書意欲の向上に向け、年度当初に低・中・高学年ごとに読書冊数目標を決め、達成状況を視覚化する「読書の花」を校内に掲示したり、学期末に本をたくさん読んだ児童を表彰したりした。

・学期ごとに図書委員会主催による読書ビンゴ、おすすめの本カード、辞書引き大会、読み聞かせや本の紹介など子ども主体の読書啓発活動を実施した。

・国語の教科書にある「○学年の本だな」で紹介してある本を必読図書として各学級にラックを設置したり、学級文庫を置いたりすることで、朝読書を中心にすぐ手に取れる環境を整えた。

・月ごとに読書冊数を集計し、児童の進捗状況を把握しながら学校図書館利用の促進や個に応じた声掛けを行ってきた。読書量だけでなく、質の向上も目指し日本十進分類法に表される中の3ジャンル以上の本を読むことを目標とした。



写真3：図書館資料を活用した成果物の展示

(3) 図書館資料や新聞を活用した言語能力及び情報活用能力の育成

①新学習指導要領に基づく資質・能力を育成するための授業改善

・年度当初に提案授業や指導主事からの講話を通して、新学習指導要領が目指す授業とはどのようなものか、授業づくりについての共通理解を図った。また、「読解力」の向上における言語能力・情報活用能力の育成の大切さや研究主題に向けた児童の姿を確認した。

さらに、主体的・対話的で深い学びの授業とはどのような授業であるか、オンデマンドを活用して目指す授業を確認した。

・資質・能力ベースの授業を目指し、1年目の学習指導案を見直し、育てたい資質・能力の具現化や情報活用能力や単元における「見方・考え方」について明記し、学習指導案様式の工夫を行った。情報活用能力については、新学習指導要領「情報の扱い方に関する事項」の各学年の指導事項や系統性を基に、学習単元で付けたい力を確認したうえで指導を行った。

・校内研修の中では、板書写真を基にめあてやまとめについて意見交換し、めあてとまとめの整合性からゴールに向けためあてを考えていくことを共有した。

・「読むこと」の単元を中心に、身に付けたい資質・能力を明記した単元計画を作成し

て、教室に掲示したり、学習ノートに貼ったりすることで児童が見通しをもって主体的に学習に取り組めるようにした。また、単元導入時ではゴールを示し、既習で身に付けた力を確認後、本単元で身に付けるべき力は何か、児童とともに考え、単元の流れやゴールイメージをもたせることを大事にした。

・月に2回のメンター会を設定（金曜日16:15～16:40）し、若年教員を中心に授業づくり（単元構想・指導ポイント・板書・ノート指導等）について、学び合うことで日々の授業につなげた。

②各学力調査や授業力チェックシート（年間3回以上）の検証による授業改善

・学期に1回ずつ、年間3回の授業力チェックシートを活用した検証を行った。学期末には、結果を基に達成目標と比較し、教師・児童それぞれの成果や課題点だけでなく教師と児童の共通する課題点等を洗い出した。検証したことを基に、対話を充実させるために話し合いを二往復させる場の設定、発表の仕方、児童一人一人の考えを把握し授業へ生かすなど、今後改善すべき点を全体で確認し、日々の授業の改善を図るようにした。また、各種学力調査後には自校採点・分析を行い、調査結果から見えた課題から原因を探り、授業を進めるうえで大事にするポイントを全体で共有し授業改善に取り組んだ。

・指定事業における3回の評価委員の訪問では、参観授業や公開授業、学校の取組について協議し、助言をいただいた。研究授業や評価訪問で明らかになった課題を全体で共有し、今後重点的に取り組むことを職員室前に掲示して日々の授業改善ができていくか授業を参観することで、授業改善のためのPDCAサイクルを回せるようにした。

掲示（例） Action（今後の取組）	
主体性	<ul style="list-style-type: none"> ・導入や展開の工夫⇒問いをもたせる ・課題設定 ・教師がしゃべりすぎない
能力ベース	<ul style="list-style-type: none"> ・教材研究 ⇒児童の実態の把握 ⇒予想される児童の反応 ⇒身に付けさせたい資質能力の明確化 ・振り返り（板書やノートにもとに）
対話の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをもたせる ・目的や話し合いの視点をもたせる ・表現する場の設定
情報活用	<ul style="list-style-type: none"> ・情報活用能力の確認 ⇒学習指導要領、目指す児童の姿 ・教材文との関連

図1：今後の取組についての掲示例

③図書館資料や新聞を計画的に活用した国語科の年間計画の見直し

・年度当初に、各学年の国語科を中心に図書館資料や新聞等を活用する単元を明確にする

ために年間計画を作成し、この計画を基に学習を進めた。また、学び方指導体系表（四万十市教育研究所作成）を参考に調べ方等のスキルの向上も目指し取り組んだ。図書支援員や市立図書館と連携し、国語科を中心に学習で活用する図書館資料等を選定し、学習活動へとつなげた。

④先進校視察や研究会への参加を通じた自校の取組改善

・2年間を通して、国語科について県内5校（宿毛市立宿毛小学校、四万十市立中村小学校、高知市立横内小学校、土佐市立蓮池小学校、香美市立鏡野中学校）の「国語授業づくり講座」や研究大会に参加した。その際、推進教諭だけでなく学級担任も参加し、公開授業や研究協議を通して他校の実践から学んだことを自校の実践に生かすことに努めた。

・6月には小笠原哲司先生（元潮江東小学校校長）を講師として招き、本校の取組における課題を明らかにし、今後の改善点をご示唆いただきながら目指すべき授業づくりを再確認した。

⑤全学年による公開授業を通じた組織的指導の研究

・研究主題達成に向けて、国語科の「読むこと」の領域にしぼり、年間6回の公開授業を行った。授業実践を全教職員で見合うことで、成果と課題を明らかにしながら授業改善を進めた。その際、ブロックごとに単元構想や学習指導案を検討し、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にした。また、設定した言語活動が本単元で育成する資質・能力に確実につながるかどうかを確認するために、事前に教師自身がモデルを作成するとともに、指導ポイントや必要となる支援等について確認できるようにした。また、事前にブロックや全体で模擬授業を行い、ねらい達成に向けた授業にするために学習内容や発問、板書を含めた授業展開を確認し、授業展開の見直しを行った。研究授業では、評価規準を基に見取る児童を決め、「ねらいの達成」「主体的・対話的で深い学び」の視点で児童の発言や行動など具体的な姿から協議した。協議の中であがった改善策を基に今後の取組を全体共有しながら研究を進めた。また、共有したことを「研究授業からの学び」として研究通信を発行した。研究授業ではビデオ撮影し、授業後に授業者が視聴して研究協議の内容と合わせて授業を振り返るようにした。

・公開授業の様子や図書館資料等を活用した授業など校内の取組について、通信「まなびっこ」を家庭に配布することで子どもたちには、どのような力が必要か考える機会となるよう家庭への啓発を行った。



写真4：研究授業の様子

4. 成果と課題

(1) 成果

○語彙力向上の促進

- ・全単元に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を位置付けた指導や、教科書にある「言葉の力」を活用することで、言葉の役割や使い方などを意識した授業づくりを行うことができた。そのことにより、児童が表現する場において学習してきた言葉を活用したり、指示語や接続語等、言葉の意味や役割を理解して考えたりする姿が見られるようになってきた。
- ・継続的に辞書を活用することで、児童が日常的に辞書を活用するようになり語彙力向上につながった。

○「読む力」の向上

- ・平成31年度全国学力・学習状況調査の結果では、国語科において平均正答率が+8.2ポイントで全国平均を上回った。特に、「読むこと」での平均正答率は89.6%と自校の達成目標を20ポイント以上を上回ることができた。また、令和元年度高知県学力定着状況調査の結果では、4年・5年ともに平均正答率で全国平均を上回った。「読むこと」では自校の達成目標を4年は64.1%と少し下回ったが、5年は69.2%と上回るなど各学年の「読む力」が向上した。

○国語科の授業改善の促進

- ・学習指導要領に基づく教材研究を進め、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業を目指すことで、資質・能力ベースのまとめ、言葉による見方・考え方の着眼点をもたせためあてに変容してきた。そのことにより、児童が、既習や単元で学習したことを活用するようになってきた。
- ・主体的な学びにつなげるため、目的意識・相手意識をもたせた導入や、活用を意識した授業づくりをすることにより、目的をもった学習ができつつある。
- ・授業力チェックシートの集計結果において、図書館資料・新聞等の効果的な活用についての質問項目では、平均3.3と目標値の3.5を少し下回ったが、「読むこと」の領域を中心に、各単元の学習に応じた図書の本や新聞等を効果的に活用した授業づくりを行うことにより、教材文で学習したことを活かして文章の叙述に基づ

いた根拠を述べたり、そこから自分の考えを述べたりすることや、資料から必要な情報を取り出したり、自分の考えに合う資料を選択して活用したりする児童の姿が多く見られるようになった。

- ・並行読書により、読書のジャンルが増えただけでなく、児童が意欲的に言語活動を行う姿が見られるようになった。
- ・対話の充実を図ることで、自分の思いを伝えるだけでなく、疑問をもって聞く児童が多くなった。

(2) 課題

●授業の質の向上

- ・言語活動の目的意識、相手意識を工夫し、児童の問いを大切にした「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業の質を高める必要がある。

・教師の発問（主要発問、問い返しなど）を精選し、児童の発言をつなぎながら表現の高まりや深まりを育成する授業展開の工夫を行う。

- ・単元を通して、付けたい力が付いたかどうか児童の姿をノートや成果物等でしっかり見取って評価し、指導改善につなげていく。

●他教科等との関連

- ・カリキュラムマネジメント表を基に、国語で身に付けた資質・能力を「生きてはたらかせる」場の設定をし、他教科等や生活との関連を意識した指導をさらに充実させる。

●「読み」の量

- ・文章を正確に読む力にまだまだ課題のある児童がおり、家庭との連携を図り、授業や家庭で音読する量を増やす。

●主体的な読書

- ・授業の中では、図書館資料等の活用により並行読書の数は増加しているが、読書目標冊数達成率84.8%、1日の読書時間達成率94%、週1回の図書利用96.4%とそれぞれの達成目標の100%を少し下回った。また、質の向上のため3ジャンル以上読むことを目標にしていたが、73.8%と100%を大きく下回った。このことから読書の質の向上を目指した取組や主体的に読書をする児童には個人差が見られるため、個に応じた支援を行う必要がある。